





さう言を嬉しむるまぢめる

し二

梅子ふれーぬの二すちし良

我雛の押を不程ふ家達て

白髪を之らへて暮を鄰を

月を待つところを妻をきりりん

杜れをさす岐阜の山向

まを返す目記のさかぬを

清めを旅を寺の境

梅の真の相をなをさし

層あうき又をれのを

るをさす東のさのあは



くまへる馬を化す振舞 二

おの国奥の松を折る月の 良

雲方よまふれ一峰の吟もの 南

連糸あや歌や白き雲街 二

後一牛子笛を反あす 良

吟詠を浪まをり笑所 南

事の上をいね舞妓ふん 二

下坊うらると食の蝶皆法 良

る我中打へ追年けん太 南

鈴杯う降り来やう不音留 二

舟の鳴るを志すいさる舟 良

岸也土町を渡り志す 南

又又後よりうつる瓜 二

志いある海ま罪あす 良

寂そくを時かた 南

月今ぬ国の若根の法廟 二

柳板のぬき生を 良

蝶あもむ杖の上を 南

杖突板日膳の 二

おま 良

多し 南

ひや 二

もとのところへ 南

張ふもの 良

妻の領の谷うぐすす 二

山吹の荒物ふきをえせよ 二

妻れをやく山の曲り月 二

風仙の少家の西園茶白ふらして 二

紀伊の沖先の白き馬 二

妙月を都小乗す松のく 二

海一杯の明る女を 二

母のそのまのあつた 二

唐の啼きをうせぬ 二

妻の冬よをぬむりの文よ 二

為の蒲の枝のせきし 二

恋を打つ枝鬼灯のまいたし 二

車の標よをうむら 二

一筋のうろ織の流よ 二

草を打つ 二

標をきく 二

るる 二

いかし 二

柳よかけ 二

種父根を 二

佛の代し 二

穴の乾よ 二

し二

板敷所を穿ぬる浦

二

さきと 煙の如く巴おき

良

中の板敷の田うさつとさ

二

者等う針の信書也取らく

南

綱干に垣の系としく

良

は江ハと不通路の浜渡の里

二

つれおきり安をむす木枕

南

何知違ひは月をまき

良

懸るう終る子ぬの松い子

二

前ナリのう層はかれ秋は

南

こりあううおもいふとある

良

細る人よつりちきり

二

峰より上り峯くさし

南

策まきも大なるもの散りめて

良

蝶をまつるよあきさうき

二

葉の香をぬるを自かく日人

すし一即糸をおし一るし

さくら櫛の存付福の餅ゆきて

大はこる月を待とる

業イノチ梅のふちいふあり

母のるまも各やくらん

ゆきやとて杖はまげも折せハ

人

まゝをり 我の雨に河一り 二

柏葉子よの跡つけて降や電 二

曲けくろふ舟も女子顔 二

船毎の内か加子懸平むきて 二

湯せ陸のまを平論させす 二

十六夜子遊行て茶の死あもや 二

餅首をほく木れり吊 二

つしをぬし綿賣つけて舞ふこ 二

さるのやうある虫をさく世に 二

花子波むさるの虫も何人せ 二

噂ひるをひりもそを滅むの 二

弱むける所山の上をせり 二

若の猿掃り 朽葉々 二

孫勤の舟を佛も待やらん 二

蕙ちもくれおちすとき 二

志のふ月を解あおま志く流し 二

火のま十府の世度あゆる里 二

名をつけて足もすけあき 桜の枝 二

和の保まりかゝる我を知らず 二

鮎永氷魚の網代のみれり 二

人のナクさの嬉しきもり利 二

和のほぬらちより茶をとり 二

恒間へ鶴のすさうち 二

ナリ

國ありは標さるるあすも原 二

母系をなげせも母衣のうけ
 佐保姫の惜うそのまこし
 宗奇生國のに志るその房口
 皆うそ車よきをもて括ぬ
 打しー ぢんのまきキ、山を衣
 人 二 人 二 人

秋近くあるや木下のむね代
 道去 蟻まふれを敷裾よ袂よ
 萬瀬 波すす車のめくし 試して
 月居 何のちふドよ合す 柏子木
 去 きの戸成館の夜す別おはし
 瀬

眠りてえーよむる草花毛
 右 大名も泣きあるまる杖の昔
 去 地震うこけし急隊のね
 瀬 古地の死者を長宗は格ふく
 右 手業せてあるす一瓢は文の
 去 旅のふるふ成高野の題して
 瀬 ちののち細をかくすきぬ
 右 燈の影のあうるちまてう姫ま
 去 石ののち花をささむ拂き
 瀬 木賀山の陽入城のその月
 右 下し 沉る心タタに打連て来る
 去 気立て酒の跡水ぬ在る
 瀬

了る事あるは過の事なり
 踏るの事の道具の大徳口
 湯候い掛く改之の事
 身の上よに茶を刈こは
 無事の園を喰いより
 和明を借と小笠を折らぬせ
 小野の茶は湯取しきくふ
 折るは紐より又声をねは
 差こそ合せし振左つぬる
 等ぬらるるを梅さうが
 弓弦ふせをちて来る船
 何ちとせし氣を思ひぬ月さう

まる夕暮々十七の夜
 暮れもさういよかゝる氣々
 太さし初に身軒のかゝる事
 ちりあやめさうさうおひ
 田舎茶のあをま書つく
 花のるの鹿澤山か所あり
 馬刀ふたを振向もせ勢

美八

暖れものやまの薪木山
 仰のあこひの大根いく新耳古
 是怪の利はさす朋之て篤志

指餌の弱ふ所 時
三月の七日の筈並のあはれ
物をもよまざる船のり合
舞にまてるもあはれ度の隣
少るほろり 喜飯のおま
籠言のたよ交せる途きき
元々指さる牡丹池一き
白粉の元一 霧の一番さ
左靴の橋に恨晴
碎確の隙より妻の末を乞
伎の底のちねりまをゆき
雛子鳴てはきき言をたおし
忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札

心算の世帯をいへ 此月
中成り急ばし雛をちんちん
弦向の加えり 車ちりさ
^{ニラ} 猿迹は換替りて廻る
混茶の味も 明りの空
先きの急いぢ川と東流の跡
肘をさすも 癖もふあ
為賣臨時の連系 終り
たると女やう返りさせぬ
討死と足怪 柵りる笑
路きのむかひるをえの下
おめり先子系色をさし
忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札 忘 札

小庭の草花はほろりちかし

丸

とりの磯子さつるさき味端

丸

おいでそえしハたのし

丸

^{ナウ}是きりの集とを又やる浦の泉

丸

穴のす甲のさうをま川魚

丸

飲喰のそとよめさるる花のけ

丸

棒うつたは歎きを折る

丸

菊代の風子扱ハはく片とら

丸

年日二三交ふ二足中、飛

丸

人の来てき運さるい勢衣うハ川

丸

船の机子さうかせる山

丸

月いつこ五佐一家のこま列て

丸

下は花のあそびさうりり

丸

一軍の店のおも久しき兼用意

丸

入相さむくはよせし次層

丸

^ウ母の中哉はる男はしてあは

丸

将身の垢ふりまはさる

丸

云々ものある田中の寺ちは

丸

伴をいざら刺もちて笑

丸

標をまもれしを井を思ひ

丸

とむりく出るを解あさへる

丸

毎つける梅垣のまうハ三の

丸

神の活轆の山麻まつとく
 名もかき破の山貝も清きとき
 世もすき程何れ風よと候
 とくあしやふり笑も花の白
 眠りたませし時よと云ふむ
 二ノ
 いなきあき岩をぬくすく赤地日
 梅の玉下うさゆせとありり
 打ちもすれと平のむよー
 小字のふとれあすむ黄地
 様めらう梅子の縄よまうりし
 蕪も吹くしほにり 枝
 五卯のむ枝をさるるお黒方
 ちのちも 枝よきからむの苦さする
 近きう思をぬけし霧のけさる
 芝もさくもあすむむ枝のき
 枝通し一葉のきむあくと水て
 中ふもよせまゝ 六月
 急も角あまを痛もをや
 箕もよ鯨の干さふを付
 唐のけり紙悟りいつら平
 何のけりとも志をあかしの間
 最中いなきもゆきさぬを打て
 花こすると平山吹りあ

鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈 友 鴈

十六夜や人を奈々の目もは 一口江
 湯を平くさるるみの秋も勢方木海
 鳴勢龍くらのまの初なり 笏志
 一月紙や打を預くる 尤
 款をもあまのいさも昔の麦
 子よ飯らとさるるまの酒の
 首合の元夜にたれを平よる
 想ふすのあかきあやしくり
 湯守の足も解れぬ息も種類
 ものくをさしむ五月かの中
 袖の襷人の袂平はくはく
 走かきと椋のむや
 船を揺るとし一月汝既
 志ともさくしあの子も抱く
 病もちと怪しきふる木保
 たり候より数金をや木
 平留の鳴志ささるるはり
 猶名のはくし門のを解
 志
 志の数を平よながかふ
 船走の向く終りはいぬ
 木
 高知の平をとり籠ます
 志
 娘つくとし籠のさるる
 尤
 手掛を時を教に後道
 木

浪花男のふきく見にけり
よーあはれきつる中もほろろ
舟を揺るす軒のあしむい
父をのちふ一日を月もほ
隣りの奴を怪我なまわす
清原屋は兼未れ若をせ
五門に重祇くそく素 徳
夏子にふるもゆき田の浪花
手を揺るせを陸る履もの
陰中の氣をぬき降り嘆
楓うさ水を流はの流つく
志川とくと侍たけの那し
まぐけ月も若き九日
志

半姜

さる此のあしきも 旨味うれ
くさの木のぬきをけり
苔の芽は錐がくさぬ波よせて 草花
少るかを神子ゆきさ教比き
とをもし子 櫻かきさえり 船の月
海のやうな 秋のちろろの利
親子伝山下家のまぐけ 神白
木をゆきうす 神子
節絶まいく 鳥の白き 花
北 二 姜 北 二 姜 北

五子の新なく佐右の十代田恒九
 舞のえを木門の産をたまけり
 二 糎ほともおきろきおき
 美 岩おき月屋空世の肥るらん
 九 じくくおする 松のぬき
 北 泥きぬ 鶴をたふぬかえり
 美 三井のみ所の日ふ共来うつた
 二 ちれをさく世の松のほき、おし
 北 紙さるの松屋のかい、さむら
 九

標堂

りあの日もあてい、くちくちく

すくも、七はよは汝のきる 佛水
 むくも、たの松よ、ささき、さき
 水 松のくさり、松屋をくさり
 水 草のえ、母のたろ、松あ、さき
 水 花子出て、くさき、を別、は、は
 水 孫や、孫の、さき、の、ほ、ほ、島
 水 松木の、熾の、ほ、ほ、ほ、けり
 水 け、こ、ろ、の、こと、千、二、家、の、あ、つ、ま、り、で
 水 産、ほ、お、は、く、を、さ、す、の、月
 水 ひ、し、く、と、何、も、つ、ま、さ、き、松、の、と、の
 水 人の、く、も、秋、く、せ、り、く、く
 水 懐、く、と、く、か、る、岩、を、お、は、い、し、

温白米の條も魚のあそいで

筈の^二葉をとりきう^一捨る^二父を^一

常陸^一川^二い^一ち^二水^一の^二末^一

傍^一新^二は^一廢^二美^一の^二花^一の^二後^一

志^一ハ^二一^一庭^二を^一め^二せる^一ま^二の^一目

と^一り^二を^一田^二を^一も^二と^一ゆ^二る^一す^二る^一氣

皆^一う^二味^一嘗^二も^一む^二紀^一傳^二の^一川^二路^一

かく^一す^二もの^一を^二我^一こ^二あ^一る^二追^一追^二事^一

兼^一行^二め^一る^二や^一眼^二鏡^一一^二り^一

其^一の^二葉^一の^二こ^一よ^二ひ^一も^二あ^一ら^二ぬ^一命^二を^一

妹^一う^二ち^一さ^二う^一を^二あ^一ま^二く^一ら^二ふ^一

は^一ら^二れ^一も^二お^一は^二は^一は^二る^一あ^二ら^一ま^二ら^一し

念佛^一の^二こ^一わ^二り^一あ^二の^一あ^二る^一

縁^一を^二り^一て^二刈^一お^二れ^一る^二二^一葉^二麻^一

名^一の^二さ^一か^二ひ^一の^二あ^一ら^二ら^一り^二杖^一

あ^一ら^二さ^一る^二は^一吹^二花^一ら^二月^一の^二あ^一

誰^一を^二飛^一る^二か^一と^二取^一く^二船^一底

乾^一鮒^二の^一は^二干^一の^二葉^一を^二は^一さ^二る^一

く^一ら^二あ^一ら^二せ^一て^二白^一果^二血^一を^二吸^一

火^一と^二り^一小^二木^一を^二上^一る^二西^一照^二り^一

こ^一と^二し^一り^二集^一り^二て^一兼^二は^一よ^二り^一

花^一を^二り^一を^二あ^一ら^二む^一も^二あ^一ら^二む^一

一^一月^二の^一似^二る^一三^二月^一の^二あ^一

を^一

を^一

よく見れも甚といふくいはりま 標半

塔樹るとの虫のまもさ 寄剛

初の月内を袖目ふあけらて 今

人の白ひをふふま交もの 電

舌前をさしておき眉のひ方 々

はらりぬのむなむな 剛

篠井の芽を撃ち穿し隙 今

東寺拜りたをすめて 電

鏡陰をうき清の鏡のまむり 今

舟の扁子さふあてりおれ 剛

ちらりと腹をさせうゆるい 今

秋に身の水はく月 半

くこりの蒸路のそをいふへ 今

こら火のかけはかけ半 襟 剛

羨の魚さるのあまきかじりて 今

三日外にぬまをさせいき 電

花まて花とあるるのなすれ 今

人よりりり一麻のまきつけ 剛

京丸の甲あつみい位そめて 葵亭

子ととぬき腹とくおき 剛

降うらうらかを種まといらん 卒

葉の口う葉をいひて 剛

其をささぐ宿の板をいひて 卒

幸良の里を宿の乾くせし
むく鳥のかぶはあさるを枝
幸のたはにあさるいのれ
寂然る子鞋不が折るは
丹信の國の杖を束はり
吾の月くらげの中を影
幸平はしるあふともや
^十 此の世にいまのよをいふを喜の
りあさる根をともめす
かたきと神のつゆの美をいふ
あはれはあさる人をあつこ
時の中をいとももねの妻
まゆくともあさるあはれをのり
亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭

糸のたをそあさるの夜 美か
かつを軒かきそあさるの月 左節
我を付の投木たしき妻 ^{あは} 布を
小徒平手哉ひままりにす
左掃うもの言ひこるすあはれ
まをささるけしあさるの志は
古所所の能も田向中なり
浪のくみ平命はるす
舟はもささるを秘をま
亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭

神廻の公邦々酔一冬ふき

札

ちかふよは枕よの何をもこし

節

あをぬきそのはるきあひき

電

代りけふりよおるの灯籠あき

札

横ちのふりかきくはる

節

圓珠の糖と吻をあき

電

神のさ庵のむらふ三日月

札

あきあきひらりあきを吹き

節

あきあきひらりあきを吹き

電

こちあき

あきあきあきあきあきあき

木のうるてる目のあきあきあき

秋

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

あきあきあきあきあきあき

電

空を渡る鳥にかけを遠くゆく
 池のすそ田うも代りある
 月を伝ふ車は伝ふ世
 きしきとくまふし
 妻のいのち茶葉もあらん
 妻をかすさる立山の防
 いるくゆのくまをみれば
 小角のいさを拾ふ大角
 熟うゆ言まぬかよ邊り歌
 法倫のいかに伝くやうある
 花れも是も熟柿のなるる
 を山さるるまをみる稲妻

雀 雀 雀 雀 雀 雀 雀 雀
 雀 雀 雀 雀 雀 雀 雀 雀

道歌

尺であつて汗もそほと二ま
 笠子あつてはさる山のこ
 独り形笛子熟柿を伝ふ
 熟うゆをこぬむらねのま
 舟角りに押つけおとりの月
 心算の鯛の積もこほり
 ほつとくる僧は月世のひつ
 古きこゝろ長のもまのいふ
 優はぬ寒のころも言おそ
 道歌しゆめのもくとまゝの

鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

新も新も狐子とくをめん
あやも思ふに似る人を換
お茶を打も箸も換ふを
二月見する銅山やある
身よりして大根辛くあがる
能登の七尾子まむ原のち
をの戸をいへりふそして既院おけ
よれもさいは柳よりある
鳥々

この世のちもきあつて月と梅
木の葉もさきをわさふを裁
重
旗

まの物一ふ存をうりむかして
おはくの人をおくる
重
旗

燈籠もあを涼しくやある
鉄鑢のあつてあつて
重
旗

和くきあつてあつてをぬけ
除夜の火をば木道の
重
旗

た鳥帽よとのよふやとた鳥帽
浪をまらふとさる標さき
重
旗

文學といふも業のあつてける
換のもれあつてあつて
重
旗

ちつしてあつてあつて
歌のやあるあつてあつて
重
旗

はまこゑのまふりて来る馬のく
ち葉焼をばり白井のまむ
袴の篠ます星花近一
田嶋の角をいばりあひく
紙 札 障 紙

衣折るさう葉をかり成美
さくくけのまの夕くさく一葉
る折る葉のちよぬき移て
あふくく一の袴のうけ 紙
箕のあつ粉袴のさの二の月
木袴らさして人のやくらく
葉 美 葉 葉

あはうさ葉の京のあをえて
あふくくさ成さのふちまみせ
みほのあまは地のまをいお糸
すくまらるにあふぬ袴の木
糸の袴をぬぎす地糸障
欠はるて書しをくく
筆ほと子遊るをちあけて
敷くちくおまむ 紙一人
山花の袴をぬけた月をく
浮存いとぬの朧ふくくあ菊
あまぬす入る履のかけら
長葉あふくくを人良の葉
葉 美 葉 美 葉 美 葉 美 葉 美 葉

降の音おれはたむ西あふ

ゆふの道入一期はさゆ

名振の片をまある葉より

あはとの思ひを誰う名よぬ

急を大り焼にちかふせ

三輪の存るう身につくふ

杜れぬ思ひ者をばすまう

葉王のや中入る月

桐二葉三葉は葉はかき

とあふまゆゆの人を待て

た浪の小橋をほけなま色

幼布をぬいてふるも

ほのりて解の穴を花のま

子の目をまらぬ汁を

車水吹をほまると無名の流り

音を更しく黒くをふ

白唄のそをまうさる神ほか

枝の葉ほとと髪にるをぬ

みうねを枝をうせり志のふ

杯さいゆ平山ほととま

我宿のそをを拂き名を

まき焼るほとのそを拾

雨

言七一月はおもひ秋葉
船

一本もこのまきはるうら
船

門^ウ連て舟の信ゆくぬの音
船

舟の降る日を系^ウいて来た
船

出たる舟の念唄は目を閉て
船

日一藪は葉あーむ人
船

臨てあふ宮は急ぎ鳩の鳴
船

萩もすきも月ハ小くき
船

松子のつらぐ杖は根の揺て
船

陣のつく根を後^ウくる
船

ひんども葉葉揚る船日就
船

眉のあはし^ウまこほすまら氣
船

穴一の砂^ウ年ちうすまのそ
船

返れていま^ウく^ウる^ウ^ウ^ウ^ウ^ウ^ウ^ウ^ウ^ウ 葉
船

そのと^ウに^ウ神を^ウ山^ウを^ウな^ウま^ウに^ウめて
船

物^ウの^ウく^ウふ^ウよ^ウこ^ウる^ウふ^ウ歌
船

村^ウを^ウく^ウる^ウま^ウを^ウ成^ウ小^ウ社^ウを^ウな^ウま^ウの^ウこ
船

里^ウ田^ウの^ウ舟^ウの^ウ波^ウを^ウう^ウみ^ウり
船

ま^ウふ^ウま^ウの^ウは^ウふ^ウあ^ウま^ウま^ウん^ウか
船

よ^ウり^ウも^ウま^ウま^ウな^ウぬ^ウま^ウを^ウま^ウま^ウて
船

舟^ウの^ウ音^ウ小^ウ人^ウの^ウ氣^ウの^ウ吹^ウえ^ウり
船

る^ウま^ウを^ウ年^ウあ^ウる^ウこ^ウり^ウ月^ウの^ウそ^ウら
船

輪^ウは^ウま^ウて^ウ松^ウ柳^ウを^ウま^ウま^ウる^ウ
船

杜^ウの^ウ深^ウの^ウ下^ウ地^ウ小^ウめ^ウる^ウ
船

大見の中もいさくをうける隅
 船の後をたしめし
ナリおとし小舟の波にのぼる舟
 橋はたまやまのまのうご
 こまをふるまを花のそらへ
 日一縁を伊勢の葉を
 もの平に遠せしむる時
 水のに帳の例をかき水
 船 葉 船 船 船

晴てり桜の白雲か白半月川
 流る

流るる花もゆふるるる花
 字笛小をひかす曲もか
 青き花の花のそらへ
 待布の影を桜おす舟の標
 流るる花の枝をこめむる
リ大山のふろを山へえ
 間を流るる花を
 おの葉の影のそらへ
 雨を流るる花を
 舟を流るる花を
 花を流るる花を
 花を流るる花を

指をい子種、牛子うつむく
初奥のそとをまゝ、即ちをまゝ
おさりのうらさを、此は此の
はるちの弁中、狹まる、花後
種、井の指をくぐる、秘人
種、三、妻、或、秘、秘
竹の糸、うらさ、秘、秘
花、秘、秘、秘
聖、秘、秘、秘
を、秘、秘、秘
は、秘、秘、秘
秘、秘、秘、秘
秘、秘、秘、秘

逆、三、秘、秘
指、秘、秘、秘
の、秘、秘、秘
か、秘、秘、秘
日、秘、秘、秘
一、秘、秘、秘
子、秘、秘、秘
花、秘、秘、秘
百、秘、秘、秘
妻、秘、秘、秘
の、秘、秘、秘

都をあらはれを浪の騒五柳こ二
松をあらはれをまーりはし 道去
舟の神もあすぬれ吹て 二
舟一くそあうはつらめそ 去
山の月こころ守けは明くはし 二
妻陽に焚れあす木鬼をたぶ 去
十ぬと三昧をののり鳴 二
舟子こゝれて命相 去
道ゆく人の問よも 二
あすの標をたぐちり 去

降る光のあをて白きあまは 二
あこりとりりる金屏の杖 去
いくえう馬のをれひる月め物ふ 二
舟屋やひて妻を侍宿 去
何よりもあはれよめる海笛 二
大井のりあす逢奉 去
散をれを寒しと人のやを 二
茶も子のをを移初るを 去
畦より垣根の山もを向あし 二
妻の一里のおきろき 去
運慶らひしめあす小舟 去
横町をますあすいま 二

父ののぶまがわらぬ
儀はさして根を切り持_子 二 去
我の庵の檜の下道ほくし 二 去
二番宿をさうきる目らめし 二 去
いふ者こそまも 檜をせりて 二 去
をのころろはふふ所めし 二 去
いふれいも速くぬ月めす 二 去
其のころまろ可児の大寺 二 去
すいすにはおもしろいけり 二 去
十日の女ぬのちねたまらん 二 去
古馬場はほまきまをまふ 二 去
溪の小貝を下持ちたり 二 去
気さけも信田の里も 二 去
鶴代あゆるまの片時 二 去

さるるの東のあはれは 二 去
いふいふいふいふいふ 二 去
麻布のあはれは 二 去
ふふふふふふふふ 二 去
いふいふいふいふいふ 二 去
のころろのあはれは 二 去
いふいふいふいふいふ 二 去
かきかきかきかき 二 去

のしんせうへんきんせうの
ゆめをいふる 駒のしんせ
幸得れぬ娘のしんせ
婿を嫁めし子かくし
ういしんせうた 娘やうい
まのうれ高き海なる 掃海
少軍のりまし ちう素
又らたてぬしんせう
さのしんせう ちう素
維多利亞のしんせう

しんせう ちう素 ちう素 ちう素 ちう素 ちう素 ちう素

十六歳きしんせうのしんせ
形をいふるしんせうのしんせ
よるしんせうのしんせ
湯もいふるしんせうのしんせ
無頼のしんせうのしんせ
婿を嫁めし子かくし
ういしんせうた 娘やうい
まのうれ高き海なる 掃海
少軍のりまし ちう素
又らたてぬしんせう
さのしんせう ちう素
維多利亞のしんせう

しんせう ちう素 ちう素 ちう素 ちう素 ちう素 ちう素

招敵はしれし海に
暮れたるに再びあはれ
いふはうきまをすはゆか
傍におもひのふか
積木のあまき海に
お四⁺春⁺すは浪⁺の入口
舟楫を運ぶ具も
櫂の櫂を運ぶ
力なすは海に
船と船を運ぶ
二人の船を運ぶ
一人の船を運ぶ

海 海 海 海 海 海 海

古鳥⁺海⁺に
舟の船も九十は
さや海に
さや海に
舟の船も九十は
さや海に
さや海に
舟の船も九十は
さや海に
さや海に
舟の船も九十は
さや海に
さや海に
舟の船も九十は
さや海に
さや海に

海 海 海 海 海 海 海

ついでにたうりもあはれ田舎 馬
牡丹窟のそとにさうさうさう 白馬
沿子靴を履き母をさすおれ 馬
そなたのそとにさうさうさう 馬
月の物に新馬のそとにさう 馬
おれにさうさうさうさうさう 馬
たれさうさうさうさうさう 馬
何やいさうさうさうさうさう 馬
相向のたうりさうさうさうさう 馬
何れがたうりさうさうさうさう 馬
馬さうさうさうさうさうさう 馬

手おれさうさうさうさうさう 全
一ひひのたうりとさうさうさう 馬
りあはれさうさうさうさうさう 馬
影のたうりさうさうさうさうさう 馬
さうさうさうさうさうさうさう 馬
よつさうさうさうさうさうさう 馬
おれさうさうさうさうさうさう 馬

眼の痛むさうさうさうさうさう 馬
絵の描くさうさうさうさうさう 馬
おれさうさうさうさうさうさう 馬
馬もさうさうさうさうさうさう 人

きつちのりちのりやあらん
那のうら又えちちち 転替
とちちち細の流もささるん
ゆあふちのうら人のあふ月あ
馬あちちちちちちちち子
角あ取氣のゆあふちち
海のゆあふちちちちちち
神ああふちちちちちちち
ちちちちちちちちちちち
みちのりの牛の額とあふちち
ちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちち

右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

あふちのりちのりやあらん
那のうら又えちちち 転替
とちちち細の流もささるん
ゆあふちのうら人のあふ月あ
馬あちちちちちちちち子
角あ取氣のゆあふちち
海のゆあふちちちちちち
神ああふちちちちちちち
ちちちちちちちちちちち
みちのりの牛の額とあふちち
ちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちち

右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

河を渡り流る馬士の歌
河の流る雲の影のまを
好も馬もともれぬ時
て た て

月夜鋪

まじりておぼしき月影
障の如くささる月影
たゞまはる月影の
不化とも月影
屋根のまはる月影
浮柿もして月影
稻を降るの月影

會はば月影の
月影のまはる月影
長津のまはる月影
之月影のまはる月影
月のまはる月影
陸の月影のまはる月影
そのまはる月影
梅影のまはる月影
月のまはる月影
月のまはる月影

何し一玉の御さり内儀 具

駕籠の型は初来きつて 室

走りの天守の御合より 梅

そとを筆でたつて利田米 具

ふきり具は御さる所 室

馬の後の御けの痛の痛し 梅

筆耕の苦いし御書す 具

尾さしつて何れも美用 室

園取つてし事な方々 梅

釜の夏の短き身は 具

用ひつても御さるは 室

旅を組つて徳利の御さ 梅

御道の御書の根元は 具

夫れは手取つて杖も傷 室

を御さる御書の御さる 梅

御さる御書の御さる 具

掃除は御書の御さる 室

此御書の御さる御さる 梅室

走りの御書の御さる御さる 山

よの家も種の余り御さる 室

御書の御書の御さる御さる 室

頑者の御書の御さる御さる 山

御書の御書の御さる御さる 山

雞山の身也。此山は女醫者
不思議の術を傳へたる所也
いふは雉の山に雨の
こゝと云くは。木を
手裏のる。後夜は。せし
押さへて。飲と。さける
服の。合身の。ぬ。あ。場
室。子。目。の。も。は。い。い。は
如。鼻。先。迷。惑。か。た。乃。水
こ。れ。損。な。生。碎
也。た。た。の。ま。の。西。大。師
た。た。の。ま。の。減。た。る。物
山 室 山 室 山 室 山 室 山 室 山 室 山 室

利。中。も。も。積。る。家。傳
海。の。一。十。掃。除。も。
廻。の。力。作。る。古。の。も。
郭。の。山。似。れ。て。席。の。も。
倉。の。山。合。有。れ。た。也。
之。の。山。夜。の。一。十。月
牛。の。山。様。の。ま。の。ま。の。け
魚。の。山。波。の。山。煮。の。山。間。の。も
世。の。山。間。の。山。角。の。山。と。利
て。の。山。入。の。山。配。の。山。七。の。山。れ。山
實。の。山。の。山。山。の。山。拾。の。山。海
字。の。山。の。山。の。山。破。の。山。損
山 室 山 室 山 室 山 室 山 室 山 室 山 室 山 室

舟や舟の諱をも親しく仲方
くみあつても月のの湯
川曲のたがわぬまゝ
雀の雌雄のたつたし
そらと白く惜る花の出高
つき合せぬ。花はあつた

たよむにたなほも母を愛す日
おの柳陽たぬむ。白雨
瓢箪のふたのふた
ちつととほの音もあつた
おととたつた。おととたつた

丘屋根をたつた。日本寺
おの乳のくして。おの乳
おととと。おととと。おととと
合歡も。おととと。おととと
けつと。おととと。おととと
おととと。おととと。おととと
持て来り。おととと。おととと
おととと。おととと。おととと
おととと。おととと。おととと
おととと。おととと。おととと
おととと。おととと。おととと

庭のくさ乃を掃く
 方の初々太氣すもの向川友
 恒き痘毎と傳り医する
 淋二挺の併し師きもとす
 何勝よりか、五橋せし
 おまひの方文受とまれ
 人遠ひてあよりも出
 鳩宿て物長ひの伏見服
 子の目くははるに
 汁三酒の相よ事やきく
 頼あけりし用を
 七夕の月、はるく出か
 人 塘 人 塘 人 塘 人 塘 人 塘 人 塘

鬼灯裂と田のけり
 常屋高の秋からけり
 心よしもせぬ
 霜よして淋も琵琶
 菊のくさくさ
 拾と花の香よ拾ひ
 嵐のくさくさ
 人 塘 人 塘 人 塘 人 塘

かゆけり
 梅室
 八乃木
 立

初らふいさむとほしきまを待
門かこらふらぬまの入り口
まな後ていふ花のふれはるま
川にすはさくはあふとさうら
吸ちふいけはさるるま
小部屋の障子持しりま
あまきこまはさるるま
うさうさかたさるるま
下京のまにあふまきこま
月まきこまのまのま
梅こまのまのまのま

室 采 豆 采 室 豆 采 室 豆 采 室

茶持こまのまのま
茶持こまのまのま
梅のまのまのま

室 采 豆

所のまのまのま
まのまのまのま
梅のまのまのま
向のまのまのま
梅のまのまのま
梅のまのまのま
大のまのまのま

室 豆 室 豆 室 豆 室

左の所の隆く〜
 みる〜梅舟の〜
 さら〜
 なる〜
 赤く〜
 月〜
 お〜
 かく〜
 なる〜
 子〜
 梅〜

12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22

舟と入る〜
 吹草の〜
 名〜
 左〜
 今〜
 舟〜
 岸〜
 乃〜
 なる〜
 月〜
 旅〜

12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22

又ぬせしほくとびにせうてう世南
きまきまうの川月うち系都夜雄
いほあまほまはしうの批吹ちう音は
はにんかかふらら街立林曹
さあらら回しにちの月乃山雄
積糸はちうてあんとそく南
秋もらるまはしうにちうそ
うまられう今もておまらるる南
ふあをぬらうはまのあまてう南
たうてうらぬあつと出る雄
うあうふたにちうらうまはし
三

あまらうまらうの魚地行まら
いっしうらうまららう流やうい
まらうらうまららうあ
あねとまららうあまらう
おらあ月年まらうあまらう
まららうあまらうまららう南
ひにまららうまららうあまらう雄
あまらうあまらうまららう三
あまらうあまらうまららう南
あまらうあまらうまららう雄
あまらうあまらうまららう西月

往乃 ぬ 宿 凡 じ 終 じ 乃 入 じ 終 じ 乃 一 宵
中 周 坊 乃 々 々 々 々 々 々 々 々 一 三
一 二 段 地 面 々 々 々 々 々 々 々 々 月
乙 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 雄
赤い 袖 顔 々 々 々 々 々 々 々 々 三
月 入 乃 中 々 々 々 々 々 々 々 宵
町 中 乃 乃 々 々 々 々 々 々 々 雄
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 月
山 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 宵
備 乃 々 々 々 々 々 々 々 々 三
山 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 月

々 々 々 々 々 々 々 々 々 雄
々 々 々 々 々 々 々 々 々 三
々 々 々 々 々 々 々 々 々 月
々 々 々 々 々 々 々 々 々 都 乃 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 卦 乃 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 梅 乃 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 乃
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 乃

似たりはるし井さくあしり
品

月影にほのめたるもかしこ
品

さるる女一ねりていふは
品

こころにありしこゝろは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

さるるあはれなるは
品

おのりつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

あはれつらふにせむらふま

らんごうとくたしちんてんごう
くまごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう

らんごうとくたしちんてんごう
くまごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう
かごうとくたしちんてんごう

上柳のまきの枯きの多林
月露一軒柳多枝多林

中世皇極危の老成たるは
宿のたを病して人を存る
よの形原の海のあはれ
気のたまる二見古木の早は
眼のたまる香露の香
二三人をたも性な道し
古の形原もあはれ
者たるのたまる水形
近の形原もあはれ
あつても能く釣る出ま
さるる雨も八專も偏
春のたまる白界
人たまる可も過
あつても能く釣る出ま
さるる雨も八專も偏
春のたまる白界
人たまる可も過
あつても能く釣る出ま
さるる雨も八專も偏
春のたまる白界
人たまる可も過

葉白田のきもわらぬ
持仏の灯も福も
見るとも守る料理
地も子息も
見るとも守る料理

一葉と利を辨

龍依鬼極元片

龍も云のそと

片持のさ

龍の一甲

燈州子

春の気色

春の志

春の原

新の舟

山

加

様

棟

花

花

花

花

花

花

花

花

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

毛根の花の葉は花の如く
花

子孫傳承の如く
重

隣りも花の如く
花

欠けの如く
重

小倉井の花も押出を二の如く
花

花の如く
花

大まぬ川を吹上の如く
花

赤くと西瓜裁き
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

花の如く
花

残籬のかくく月を照らす
本戸くく日なきは舞の影
押さへて踏つては宵の月
用之の給ふも心ゆく
柿年とて何れと程形
火口煙をき想ふ
昔年のく借りて干女帯
悪ふもくくむ 春酒
柳幅くくくと埃を舞ふ
美法路もくくく 追福
何れとて影もみるも月

子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白

くくくくくくくくくく
冷脈をくくくくくく
人足踏平くくくく
花もくくくくくく
煮豆もくくくくくく
懐子他人の中くくく
くくくくくくくくく
あの川はくくくく
大明神も初くく
儒者宛の書くくく
春もくくくくく

子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白 子 白

臨鏡の志母の三燈くく物十匹
多ふともるのよき事少く海到
境月より高くも物正世類寺
落し、強々善文のそ記
葉や用の五板は澄正有夜
破の色以てぬ経の虫
新居に新紙も入る振撮
空算は二百はほのやまより
宮嶺の西院を役のけし木
残海くくし海苔の冬
陽本もくくしとるしとる
白 子 白 子 白 子 白 子

真の作法をかく棟上テ 子

不空の花より来てきく牡丹か香は
くくくくと乾く銅の折る 木白
難得も持を自下寸香所く、
豆派とふそのな法 初る 豆
半片空の表のあは法梅 内
押 くらねく 兼尻の透く 白
石立く愛口のよん 貝割菜
用 けりあくく再くして紙 豆
結うても縁のよき地をく 白

年々々々 髪 櫛 挿 手 傳 白
吹 降 子 踏 小 崎 小 崎 子 子 白
恒 拓 つ 子 子 子 子 子 子 白
月 の 秋 一 晴 つ 子 子 子 子 白
お 子 子 子 子 子 子 子 子 白
鹿 子 子 子 子 子 子 子 子 白
口 上 子 子 子 子 子 子 子 子 白
花 の 中 子 子 子 子 子 子 子 子 白
え 子 子 子 子 子 子 子 子 白
孫 子 子 子 子 子 子 子 子 白
草 子 子 子 子 子 子 子 子 白

書 子 子 子 子 子 子 子 子 白
と 子 子 子 子 子 子 子 子 白
利 子 子 子 子 子 子 子 子 白
共 子 子 子 子 子 子 子 子 白
短 命 の 子 子 子 子 子 子 子 子 白
嫌 の 子 子 子 子 子 子 子 子 白
風 子 子 子 子 子 子 子 子 白
何 子 子 子 子 子 子 子 子 白
い 子 子 子 子 子 子 子 子 白
木 子 子 子 子 子 子 子 子 白
新 の 子 子 子 子 子 子 子 子 白

云々 白

毎ても月々々々々々々々々々々々 白

夢徒々 白

丹きら 白

白

萩の香 梅室

風のむら 陣来 白

小葉 白

弁既 白

卒徒 白

七知 白

山雀 白

抱く 白

腹之 白

ちんちん 白

後来 白

市の魚 白

せろ 白

そし 白

榎の香 白

子供 白

川延子種口のぬい花の比
とろくろくろく曲る山階
白

さやふもつれを是にの抄紙反木海

田代...か...を...堅くして...
空隆

藤原...金...多...鞋...を...
巻乳

ふん...油...ち...く...と...大...
海

鳴...あ...れ...子...の...
種

物...
礼

と...
海

山...
種

早...
礼

手...
海

年...
種

美...
礼

久...
海

額...
種

か...
海

清...
礼

曲...
種

上...
海

上...
種

田原館 谷之山 寺に於て 秋

山に於て 宿を 留めて 秋

六月廿七日 宿を 留めて 秋

宿を 留めて 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

越後 宿を 留めて 秋

佐賀を 留めて 留めて 秋

妙子 宿を 留めて 秋

紙目 宿を 留めて 秋

泊り 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

九月廿七日 宿を 留めて 秋

踊て世に 踊 多し
精進の 能を 得る こと
うき かなし かなし かなし
一たび 世を へり こと
園と 結ぶ を ゆる こと
杜多し 世に こと
新時 多し こと
門は 多し 掃除 御心 こと
秋の 多し こと
よる 多し こと
念ひ こと
新時多し 掃除御心 こと
念ひ こと

目におす こと
月には こと
ちか こと
涙の こと
あは こと
踊の こと
うき こと
四角 こと
新市 こと
この こと

一 新
二 新
三 新
四 新
五 新
六 新
七 新
八 新
九 新
十 新

こ返つてきりて遠く 街 内
つらとけのおまゝ又遠い
ふあをくあゆのりりくする
物おし使ふも鶴を尻向て
贈あしと祥チキつゝふが季
直屋駕と一存まゝくもこれ
桂のつらまゝ舞のぬぬ
^{ナラ}うきすもこ葉子吹ふめりも
短切し愛のながゆふい款
世支交のうらかきく宿の馬
~~あまをの民のたて来もて修キ~~
牙 郎 雨 彦 牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙

行喚い細長をそらう有かきう
死チキあまのちかきく系方明きぬ
つれのほろり休ねるもなき
横が代衣のともくもあき
かしくあま袴もなき如袍着
七出うつろくと月附チキく
けききけきと蝶の虫思
鴨上戸チキ祿も思
かきくはな交強も秋乾チキ
め序し持し何穢まつらぬ
村妻子供おてかゆも同チキ先
牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙 郎 牙

長谷舟を海川流し
頃しては霞の香れ来むは
たははけいのまらるる手
郎 牙 郎

高藤やれりては二人倒る
同郎

細くわたりては腰をもち玉
郎 牙

ささかす雲霞はなる帆のた
郎 牙

よ〜拭ぬ〜極まり〜こ
郎 牙

けり業をつふふつ、挽き至
郎 牙

余けり深〜と京は極
郎 牙

電〜と梧城の程の夏は
郎 牙

高張る名を 激しなり提
郎 牙

杖持所とては城下は
郎 牙

下はつらつら〜川に
郎 牙

車はゆき〜と〜ある鬼の
郎 牙

けはかしの跡子押さハ倒
郎 牙

今卯〜除き〜月と〜
郎 牙

板の裏さ〜と〜け〜ら
郎 牙

陀す〜は強〜と〜る二
郎 牙

新卒は病子〜と〜口利
郎 牙

文七〜新子〜し〜初〜
郎 牙

染あ〜は〜下〜の〜
郎 牙

夏は下りてきてとてなほ抱き
如くをれ ありしを御
葉の通うは何人ハ竹を
黄人の親も新も仁合
紅梅の葉もなほの去り
夜は明けとてささき かな
牙 牙 牙 牙 牙

西歌仙

~~并にあかす ともいふも
月をいふも ともいふも
をいふも ともいふも~~

西歌仙

一歌

并にあかす ともいふも 土御
月をいふも ともいふも 梅回
をいふも ともいふも 泉川
見せらるる 春花 川
葉のしほも ともいふも 推己
鯛の徳も ともいふも 橋堂
山伏の葉も ともいふも 丑雄
赤や馬と ともいふも 枕林
梅の葉も ともいふも 春巧
くちが ともいふも 省我
をいふも ともいふも 毛浦

ゆりりの子に後か等文
今細介月又出橋の上
井谷 涌まかしの通あつ門
雪雄 ちくちく玉の如く
瀧下 長白 何れ樹のむし
伴世海 蟹雪 又
蝶鳥と狐と馬と
日 米彦 ちくちく
やんちん女田螺壳 相栖
音のまゝ入りおもしろ
既負 冬の内紙
波の部と食負 玉層
海鳥のうら海の鳴き
化具

小氣の表裏と袖とけ
後 石明 鳥の表と裏と
け 武後 ほか
ぬきぬき振版の
花あけ 年及 小言の
中子と年と 橋も
馬の尾のひらいて
糸心 麻門 びくびく
まきい 屋敷 日
才波 上人の云
表のくも 氣花 篤充
之くち越えて
白く 小鱗 尾凡 西橋
のすつとすつと
川をうら ちく ちく
思ひ 橋のた
八日 自由 蝶のうら
海とを
表裏 花 凡 坡

五郎の心一はる日之千
振舟子後之流境接く人
舟車らとて一日程の事
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人

舟車に立掛る舟車人
舟車に立掛る舟車人

天保乙未秋七月

またものまねあまみ蘇乃乙卯

徳翁居一る侍を乃月施五

小倉堅成を就神みいひ持る

素くつるいふれきふり

やまをなすもの四つる布の中

相成中一高成松成いふ

情味あまみ斗まを成ももなる

そめあまみ一さやふ川

おこののつらふさふおあは

しそくお糸けいひききていしる 己
こひしも附おらしたぬのせ 布
月成あるとる物乃二る聲 己
孫持の物なふらつて実実家 布
小粒おしとむ津の粒ひ 己
ここの子らちととととや飛おけ 布
法理持つけるた乃平とと 己
いふ乃りもるなりおのあらひ 布
ぬるしてあゝる流のとこい 己
おあゝるふと砂のなぐ船輪 己
屋屋いも能いおるひすも何 布

おろしお針とつとて乃めいこ 己
下針おとも平物とや 布
一平生ことせととむる漢也 己
富みの何乃糸持けとる 布
ちと直せつと男乃生かたり 己
いしーのぬいやめるなすふ 布
さたゝあてふと履けひくせ 己
いふりいふりぬるいせの茶 布
お除子こともゆり能ぬお 己
弱持せととり持ある物 布
お物の能つらととれぬとと 己

新よりなるく川なるる、
とをふるはかりるしんてはの暗
縦印のそりはしと立
おより人とあてらうや
二月五らやつとあさる
布 己 布

三越掃子や金さうとる小巻下
四下りのおまふはる埋火
とふそとれたる物
物とらる年あるとら
月もるはる三月の全
札 什 札 什 札 什

風名あてはてかふる地
西院糸通のやとるる
とふとらるから原か
老の服平約計はける
物つしとやう平
入は地海にさく地子
中平よりはは乃とら
降とらるは月とら
栗皮むとらるは
とのあはるは
なとらるは

目録に云ふ所の生れたる以
てありては乃多の爲に
三十一
まゝに云ふ所の生れたる以
つらに云ふ所の生れたる以
物も亦云ふ所の生れたる以
那を云ふ所の生れたる以
川と云ふ所の生れたる以
あまの川と云ふ所の生れたる以
流も亦云ふ所の生れたる以
次を云ふ所の生れたる以
陸を云ふ所の生れたる以

船の川と云ふ所の生れたる以
洞も亦云ふ所の生れたる以
小言の川と云ふ所の生れたる以
十の川と云ふ所の生れたる以
其の川と云ふ所の生れたる以
此の川と云ふ所の生れたる以
次乃料理の川と云ふ所の生れたる以
利の川と云ふ所の生れたる以
此の川と云ふ所の生れたる以

天保六乙未年

花を掃て又花を置く柳葉 茗坑

修てい存島く西田は音 桐亭

焼餅を祝するが友のり 新瑞

やう野のこのくをるい新 坑

やう角はくは良うはまきし博友 堂

まじりし中よはまむま輪 坊

色は一毛の龍の始は不世地 坑

誇ぬくまけ志を演擲之 堂

云ふに其子風も逐以や久き 坊

沖葉も足はし折て出する 坑

生野を古はは瀧のつらし 堂

野々多漸く西の洞院 坊

入付もまうあぬせりのまじり 坑

去る費も人よきとぬ新針 堂

世葉はまきあ流を肩あはく 坊

口をくしへらまはあり 坑

海地も古江もまき流を流す 堂

法よりいしはくまはのけい 坊

つふとまはも掃め山まき 柏係

法より多まはく流すをぬる 堂

沖桐の葉もまき流を流す 坑

まがふと下夕寸花師の友に引く
口にてまがすぬくおのまに暇
南ふま役あて思持居
惟子と弟もぬぬ法に提
まのShirley's nameの海に
よまのわらわら100はま
amのonのonのonのonのon
あふのonのonのonのonのon
あふのonのonのonのonのon
あふのonのonのonのonのon
あふのonのonのonのonのon
あふのonのonのonのonのon

本はなほしぬる 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

○

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

あふのonのonのonのonのon 年

う ちまふ 後る 多一 群 圃

後 なる して 望 程の 程 なる なる 圃

吹く とき なる なる なる なる 圃

後 なる なる なる なる 圃

あ なる なる なる なる 圃

以 たる なる なる 圃

飯 なる なる なる 圃

こ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

も なる なる なる 圃

月 なる なる なる 圃

ね の なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

あ なる なる なる 圃

一 南地す所也
脚の味み又きふたし伊印
一 爲の氣長きくを後
まきくを松子なる仙飯子
信濃と從て飛らるるをよ
暖のうら時尺る子能心
ふ以まきの傳らるるを
るのせ入成をたぬ元
心と政を疾くもを
志

一 信濃の多所あるの
ほみゆの様の木伐はな
海峯二十七年の遠
あはれこれとを路
いちちのおてもあ
徳かーらあらぬ
松子驛
たふゆりむを
味
智多法
はつて

山の赤穂藩に訪ぬるあまの具
めらぬるもいづれは法に依りて

○

唄にふるさとはなほいづれもあはれ

細のきりしのほろよしりし中子

か馬具の上帯もあまのあま

いり路もあまの腰をたぐりて

ほろよしりしのほろよしり

花子もあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

検約れもあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

二人もあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

ふそ尾座一子
海づりも大子みけの面
柳仏のあちよ
糸より柳葉もあれ
花を付解れ
色く霞月共の
遠みはけ
血の皮
下部の
さびく
おと
子
子
子
子
子
子
子
子

十

あつるまき
籠一
馬
耕
て
と
子
子
子
子
子
子
子
子
子
子

0

ま
海
境
切
子
子
子
子
子
子
子
子
子
子

とて下とて一十種類
たうくたうくたうくたうく

ちんちんちんちんちんちんちん

あつあつあつあつあつあつあつ

らららららららららららら

いんいんいんいんいんいんいん

えいせいせいせいせいせいせい

いんいんいんいんいんいんいん

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

えいせいせいせいせいせいせい

片々を綴りて居る、却る
あふりの縁に母の影を
たゞとて、こゝに、
海に波は、角の、
月を、
こゝに、
上は、
如き、
程、
河、

人 人 人 人 人 人 人 人 人

と、
お、
お、
お、
お、
お、

人 人 人 人 人 人



